

えぬびいOh!

Vol.39

2009年

やよい
弥生の号

発行：高知市市民活動サポートセンター

音をつなげる、ひとをつなげる



2009年3月1日嫁石の梅まつりでのグレイグース

音と人の出会いづくり

昔、毎日部屋に閉じこもってピアノの練習ばかりしていた私は、本当は、高知の青い空、青い海と同じくらい人との交流が好きなのかもしれません。

自称「天からいただく気を音に変える鉄持つミュージシャン(笑)」として、エルスール、グレイグース、楽団ガッキヰカン、カプリースジャズカルテットなどで演奏活動を行う一方で、コンサートの企画や裏方も行ってきました。

1990年に室内楽を身近に楽しんでいただくために四国サロンコンサート協会を作り、フルート、ヴァイオリン、チェロ、チェンバロのアンサンブルによるバロックコンサートを約10年にわたり開催。県内外の沢山の方々のご協力を頂きました。森の中や畳の上、そして使用中(!)の酒蔵なども会場になりました。

1996年にはしっかり裏方の苦勞をしようと、その名も「96企画」を発足。町の方々に好評いただき、また演奏者側からも「お客様が心から楽しもうという空気感のおかげで気持ちよく演奏できる」と大好評でした。

2001年には音の広場カプリースを作り、地元演奏家に気楽に開ける演奏の場を提供。奏者と聴衆が一体感を持てるワンフロアでのサロンコンサートを現在も続けています。どうも私はステージに立つことと同じくらい裏方が好きなようです。

音のNPO 始めます

そしてこの度、「特定非営利活動法人こうち音の文化振興会」を立ち上げることになりました。実はこの大それた展開に私自身がびっくり仰天しています。周りの方々の強力な薦めでやってみようかなと思ったら、立ち上げに必要な10名が、しかも裏方好きの懐の深いメンバーがすーっと揃いました。裏方好きなんて1人でも見つけるのが大変なのに、すごいことです!

この会の大きな目的は、意欲ある演奏者を依頼者につなげることです。つまり、私が今まで細々と続けてきたことを、個人のツテではなく、広く高知県内を中心に団体として行っていきます。地元演奏家に光を当て、心温まる演奏会の場を一つでも多く実現できたらと思います。5月頃から始動する予定です。皆様どうぞよろしくお願ひします!

きたむらまなみ
北村真実ピアニスト 高知市在住
高知丸の内高等学校音楽科、高知福祉専門学校、
つくし保育園などの講師 かるぼーと評議員

食は心・体・未来をつくる原動力

食を考えるシリーズ④

食と健康と環境をつなぐ活動に関わる「高知ナチュラルネットワーク」代表の野本江利香さん。そして高知城の北で自然派食堂「みんなの家」を運営されている生野宜宏さん。お二人に大事な食の本質を語っていただきました。
(野村・川窪)

◎大地とつながる笑顔の食事

野本:4年前、本格的にマクロビオティックを学ぶ中で痛感したのは「命としての食の大切さ」。栄養素の摂り方以前に知ってほしい食との向き合い方を広めるべく、最初は恩師を招いて講演会を、その後自分で講演や料理教室を始めました。

何を食べるかももちろん大事。でもそれ以前にどんな気持ちで料理するか。料理を通して食べ物からあふれる大地のエネルギーを五感で受け取る。調理をそんな時間ととらえたら、作る人が一番の「元氣」を台所でもらっています。台所に立つお母さんの元氣な笑顔と愛情こそ、家族の元氣を生み出す何よりの栄養であり、最高の調味料。そして楽しみながら作るとやっぱり美味しいから食卓にも笑顔が生まれます。家族や友達同士一緒に笑いながら料理し笑って食べる時間を持つと、心も体もすごく元氣になれます。食事は食べ物を通して大地とつながり、命をつなぐ大切なひととき。食が生まれる現場と食べる現場がずいぶん離れた今、食事を通して自然からの恵みと自分の命の元となってくれる食べ物の命、それを育ててくれた人や料理してくれた人に感謝する心を育むことが一番の食育だと私は考えています。まずは自分や家族のためにゆっくりと美味しいお茶を淹れる、そんな時間を作ることから始めるといいですね。

◎食費は命の値段

野本:自分と同じ環境で育った食べ物が、自分の心と体の元になるのが一番自然。高知で暮らす私達は高知の旬の食べ物を食べるのが理に適っています。旬の野菜は自然の力で元氣に育ち、何より美味しいですよ。近年は忙しさに追われてどうしても食がおざなりになっていました。でも「食」は自分の心と体と未来をつくる原動力であり命の源。いわば食費は自分の命にかける値段です。自分が今口にしているものが、自分自身となる。なりたい自分の元となる食材を、自分や家族のためにきちんと意識して選んでほしいです。意識が変われば食に



かけるお金の意味が変わり、食材の選び方、お金の使い方が変わる。その結果、最初は食費が一時的に上がっても結局は今より食事にお金をかけずに豊かな食事を得られ、自分も環境も元氣になるという嬉しい結果につながります。まずは地元にある旬の食材の美味しさ・素晴らしさを私達が再認識して、地元の生産者さん達を応援していきましょう。私達が選ぶものが未来に残っていく。買い物を通して大切な子どもや孫、そして未来のために残したいものに一票を投じていることを忘れないで下さい。

◎正しさより楽しさ

野本:これから世の中が大きく変動するなかで、いろんな選択を迫られることが増えてくるでしょう。私はその時の選択基準は「正しさ」より「楽しさ」だと考えています。正しさは時として人を批判・攻撃し、追い詰めます。わたしがやっている食や環境活動にしても、正しさを前面に出すと聞いてくれる人の顔もしんどそうだし、何より自分がしんどくなるのです。しんどい活動は続きません。人は自分の力を最大限に発揮している時、自然と笑顔になっています。その笑顔に引き寄せられて、また新しい笑顔の花が広がっていく。そんなふうこれからも食を通して美味しく楽しく元氣良くNPO活動を続けていきます。

高知ナチュラルネットワーク:<http://www.kochi-natural.net/>

～自然への感謝の心で～

◎みんなの笑顔が集う場所

生野:もともと食べることが好きだった私は、若い頃、インドをヒッチハイクの旅をしている時に病に倒れました。そして療養中、マクロビオティックに出会いました。自然に任せることが身体にも心にも一番いいことだし、それが環境を守ることに繋がるなら、いいことづくし。これからそれをやりたいと考えました。できれば田舎で自給自足できたらいいなと思いました。

食べ物にも身体をキレイにするものと、汚すものがあることを聞いていました。自分の体験でも食べることで、健康的に身体が動くことが分かっていました。そんないろんな経験を、自分だけのものにするのはもったいない。いろんな人と共有して、お役に立てる場所を作りたい。いろんな人が出会い集う場所、それが「みんなの家」になりました。ここで、とにかく命を味わうってどういうことかと感じてもらいたい。愛おしく思う気持ちで料理を出しています。

私も楽しいことを大切にしています。NPOも他の仕事で忙しく「ゴメンゴメン」って言っているくらいが丁度いい。

いのちをつなぐ

生野宣宏さん



夢中にガーっとやっていると、おかしくなります。正しさではなくて楽しさ。食に限らず、自分たちのやっている環境活動も同じですね。食のこと、環境のこと、心のこと、それらがNPO活動とつながって、新しい文化が生まれそうな予感がします。そのチャンスが今年だと感じます。大変動の年を楽しみたいと思います。

自然派食堂 みんなの家:<http://www.minna-no-ie.com/>



マクロビオティックとは・・・玄米菜食を中心とし、その土地にその時期に育つ旬のものをいのちまるごといただくことで自然のエネルギーを心と体に取り入れながら、好きなことをやってやりぬくための生命術。



地域ぐるみで 防災を考える

みさと防災フェア実行委員会

近い将来必ず来るといわれる南海地震。防災訓練の参加者は思ったほど伸びず、顔ぶれはいつも同じ、そんな悩みを持つ地域も少なくありません。

一方では着々と地域力をつけているところもあります。地域の諸団体が協力して開催する最大規模の防災イベントとして有名な「みさと防災フェア」に参加してみました。

◆第12回みさと防災フェア

みさと防災フェアは平成10年、三里中学校を会場として始まりました。平成7年の阪神・淡路大震災をきっかけに、地域防災力を強化するにはどうしたらいいかを考えての試みでした。

中心になったのは地域にある児童養護施設の南海少年寮(藤原亨施設長)。もともと施設独自の防災訓練を実施していましたが、起振車体験を行う時、南海地震を想定するなら地域ぐるみの防災対策が必要であること、また「災害はおとも子どもも等しく降りかかる」ことから、小学生・中学生にも参加してもらおうと、高知市消防団三里分団と合同で地域に呼びかけ、総合的な防災訓練を開催することにしたのです。

この「まつり+防災」がポイントなのです。実際の災害で役立つだろうかという懸念もありましたが、回を重ねるごとに参加者が増加。国・県・市・企業・NPO・PTA・ボランティアグループなど多方面からの協力を得て、今では800人が参加する一大イベントに成長、地域住民の防災意識の向上に役立っています。

12回目となった今年のテーマは初心に戻って「地域の絆の強化」。1回目に小学1年生で参加した子どもたちが、今では高校を卒業する年齢に達していることを強く意識し、防災文化を根付かせて次世代へとつなげることを目的としました。



古式梯子操法

◆楽しい、必ず役立つ、お得

2月22日、あいにくの曇天でしたが、第12回みさと防災フェアがオープンしました。災害は雨天晴天を問わずやってきます。ですからみさと防災フェアも当初から雨天決行と決まっています。

参加者は受付と同時に抽選券と来場記念品、さまざまな防災に関するパンフレットを受け取ります。今年の来場記念品のメインは圧縮された軍手とタオルのセット(400円)、四国建設弘済会の助成も受け、無料で配られます。毎年参加すると少しずつ防災グッズが揃っていく仕掛けになっているのです。

会場は高知市三里中学校のグラウンドと中校舎、体育館の3つに分かれています。

グラウンドでは、飛び出す映像がリアルな土石流3Dシアター、放水が的に当たるとカラーボールがもらえる水消火器放水体験、倒壊家屋の救助に欠かせないチェーンソー体験、はしご車体験。他に災害救助犬の活躍、赤パイ隊のデモンストレーション、古式梯子操法などが楽しめ、もち投げも2回行われました。



放水体験

中校舎ではビデオ上映や各種模型による防災学習、災害用伝言ダイヤルや飛散防止フィルムの実演などが行われ、熱心に話し込む人も。

体育館では子どもたちに遊びながら防災意識をもたせる「あそぼうさい」が開催され、防災カルタとりや新聞紙スリッパ作りに、子どもたちが競ってチャレンジしていました。

恒例の炊き出しでは、具たくさんの豚汁、おにぎり、熱々のご飯パックが振る舞われ、「寒い時はやっぱり温かいものに限るね」「後で半分食べれるようになっているパックだといのに」などの会話から、地域の絆が自然と生まれていました。

グラウンドで行われた救出訓練デモンストレーションの後は、体育館で消防音楽隊の演奏や、三里小学校・十津小学校の生徒たちの発表を聞き、防災キャラクターショーを楽しんだ後、抽選会で盛り上がりました。



小学生の発表「こちら三里防災情報局」

◆新しい組織作りと拠点

みさと防災フェアという単発的なイベントで終わるのではなく、この培ったネットワークをもっと活かさないものかと、地域の諸団体が協力して、新たな組織作りも検討されています。それが仮称「みせたね(ミサトセーフティータウンネットワーク)」です。

地域の安心・安全のためにもっと地域力をつけたいと、防犯、青少年の育成、地域福祉の充実、地域の活性化など広い分野で、防災文化を根付かせるための試みが行われようとしています。

一方、高知市は種崎地区に津波避難施設「種崎地区津波避難センター」を建設、オープンは4月です。

この建物は想定される地震に耐えられるよう、揺れや津波に強い楕円形構造になっており、いざ災害が起こった時には3階と4階が避難スペースとなります。1階には備蓄倉庫が構えられ、また高知市消防団三里分団種崎部も併設されています。

平常時には1階の展示スペース、2階の防災学習室を活用して、常に防災意識の高揚に努められるようになっており、新しい防災拠点として期待されています。

最初こそ住民の自発的な防災への取り組みでしたが、時間をかけ、ネットワークを広げ、みさと防災フェアは育っていききました。微力ではあってもやってみること、やり続けること、地域力の大切さを、みさと防災フェアは教えてくれています。

(水木)

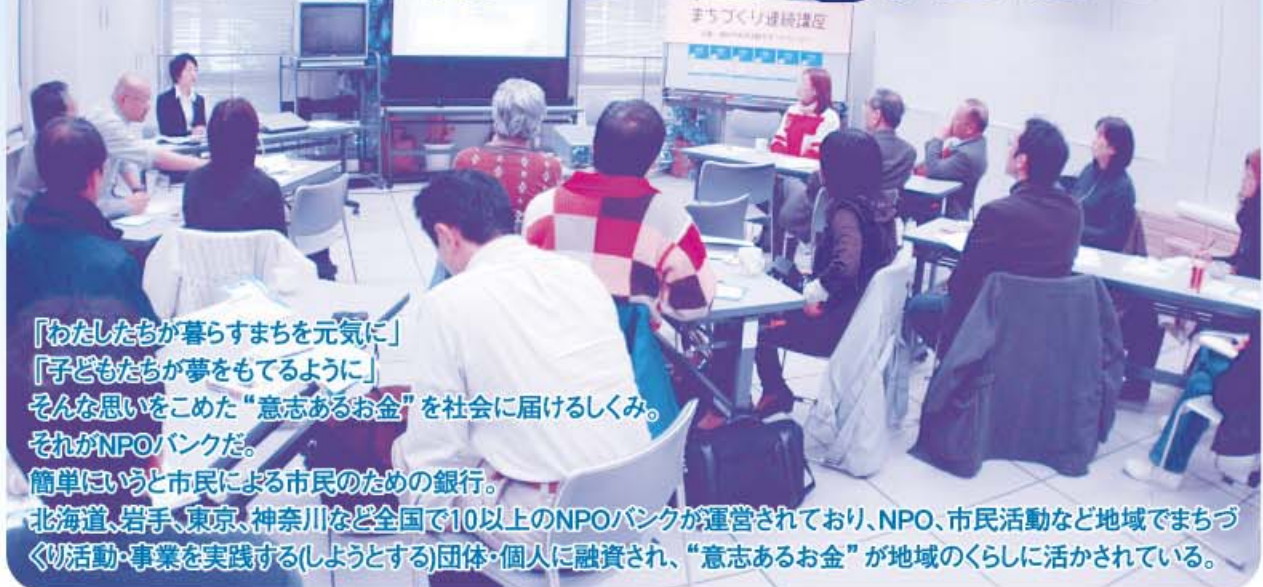
問い合わせ先:南海少年寮

住所:高知市仁井田845-5

電話:088-847-0631

メールアドレス:ryouchou@nansyo.or.jp

意志あるお金を届ける NPOバンクを考える!



「わたしたちが暮らすまちを元気に」
「子どもたちが夢をもてるように」
そんな思いをこめた“意志あるお金”を社会に届けるしくみ。
それがNPOバンクだ。

簡単にいうと市民による市民のための銀行。

北海道、岩手、東京、神奈川など全国で10以上のNPOバンクが運営されており、NPO、市民活動など地域でまちづくり活動・事業を実践する(しようとする)団体・個人に融資され、“意志あるお金”が地域のくらしに活かされている。



川村友美さん
【コミュニティ・ユース・バンクmomo理事】

さて、ここ高知でもこの“NPOバンク”の可能性を考えてみようじゃないか!と
思い立ち、数あるNPOバンクの中で、名古屋市(愛知県)で活躍する「コミュニティ・ユース・バンクmomo」の川村友美理事を招いて話をうかがうことにした。

“momo”では、NPO・市民活動団体に対して地域に貢献する活動がキラリと光っていれば積極的に融資に乗り出すことを第一としている。そして、収支の考え方や活動スキル、地域にもっと響くための手法、返済計画などに一抹の不安があれば、“momo”を支える公認会計士、税理士、銀行マン、経営者、学識経験者、主婦など(以上、みんな無償ボランティア)が、手厚いフォローとケアの手を惜しげもなく差し出し、お金のつながりだけではなく、主人公である借手手を“momo”のスタッフが支え、ていねいなつながりを以ってきめ細やかに応援しているのだ。

もちろん、融資に必要な審査は必須だ。ただし、“momo”

の場合は、貸せるかどうか、返済が滞りなくできるかどうかの審査だけではなく、お金が地域の自立の源になるために最善の使われ方ができるかどうかを見極めることに主眼を置いていることだ。そして、「よしいける」と判断を下したなら返済計画などあらゆるサポート体制を構築するのだ。そのための作戦(支援)会議を幾度もくり返し、ヒアリングや实地踏査も行う。いやはや、貸し手と借り手の協働を探り、そして実践する“momo”なのである。

一方、バンク運営には厳しい現実がある。切迫した運営費、法的問題(貸金業法など)、資金調達など…今のところ“momo”のスタッフの熱いおもいで様々な困難を乗り越えているものの磐石ではないのだ。

2時間半という短い時間だったが、“momo”に関わる多くの人々のNPOへの真摯なおもいと汗が、大きな力となって様々な困難を乗り越えているんだな〜と胸を熱くした瞬間であった。(しのみや)

名前の由来である“momo”は、ドイツの児童文学者ミヒャエル・エンデの代表作「MOMO」からとられている。モモという女の子が、「時間泥棒」から奪われたまちの人たちの大切な時間を取り戻し、生きることの本質や真の豊かさをすべての人に警告するというストーリーだ。

まちづくりトークサロン

市民のチカラ

～市民によるまちづくり活動の広がり～

「高知が何だか楽しいんだよね。だから何度も来ている」高知市まちづくりファンドの運営委員長、早稲田大学教授の卯月盛夫さんは言う。「お客文化」「よさこい効果」…いろいろな言葉で「何だか楽しい」を説明する。しかし、それだけではない何かがある。そんな気がするの私だけではないと思う。



左から岡崎市長、山中さん、山岡さん、高橋さん、卯月さん

2月12日(木)に開催されたまちづくりトークサロン「市民のチカラ ～市民によるまちづくり活動の広がり～」には約110人の市民がかかるぼーとの小ホールに集まった。まず、卯月さんが住民によるまちづくりの意義について、①行政、企業ができないサービスの提供 ②行政の仕組みや体質を変える ③シティプライド、わが町意識の向上 ④コミュニティの再生 ⑤町の活性化を促進することを全国の事例をもとに話をされた。

その後、卯月さんと、これまでまちづくりファンドから助成を3回受けファンドの卒業証をもらった「高知発達障害等親の会KOSEI」副代表の高橋昭一さん、「大きな一歩コース」で初めてのハード助成をもらった「アテラーノ旭」代表の山中雅子さん、商店街をフィールドに子どもの健全育成の事業を実施する「わくわくワークるんだ商店街実行委員会」の山岡美和さん、そして岡崎高知市長の5人による活発なまちづくりトークを楽しんだ。



同じ会場で紹介された他市の市民活動の紹介パネル

●共感で育てよう市民のファンド

2003年度から始まった高知市まちづくりファンドは、これまで59事業が助成を受けた。高知の特徴として、屋外での活動や食べ物をテーマにしたものが多いという。また、ストリートダンスの世界大会を開催したり、市民活動を支援する学生の組織を作るなど、若者の元気で多様な動きは他県とは違うということだ。

しかし、ファンドもこのままでは後4年ほどで基金が底をつく。そこで出されたアイデアが、「ワンコインファンド」。500円を市民活動に投資する市民による仕組みづくりが提案され、市長も「何らかの形でファンドを継続したい」と意欲をみせた。また、会場からのアンケートでも「ワンコインファンド」に対する好意的な意見が多く寄せられる結果となった。

市民活動は地域課題の危機感や課題をエネルギーに、企業や行政だけでは「できない壁」を共感を得ながらしなやかに越え、社会の仕組みを変えていくチカラを持つ。そんな「何だか楽しい」ワクワク感が活動の広がりへと継続につながることに大いに納得したトークサロンとなった。

(内田)

※公益信託高知市まちづくりファンドの詳細につきましては、高知市市民活動サポートセンターにお問合せ下さい。

高知市市民活動サポートセンターは10周年を迎えます

サポートセンター事業のあれこれ

NPO高知市民会議
西村正江

サポートセンター事業は年度初めに立てた事業計画に沿って遂行していくのだが、緊急を要するものについては他団体と連携しながら迅速に事業化し行動してきた。緊急を要するものといえば、災害復旧活動で、そして欠かせないのがボランティアの存在だ。

2000年9月の「東海豪雨災害」、2001年9月の「高知県西南豪雨災害」には、被災地へバスを運行。多数のボランティアを現地に派遣し、災害復旧活動を行った。

「高知県西南豪雨災害」被災地へのバス運行には、私もスタッフとして同行。新聞告知で集まった市民ボランティア50名とともに、1泊2日のスケジュールで土佐清水市の下川口へ向った。復旧作業は土石流の泥との戦い。「頑張らないで、休憩を取りながら作業をしましょう」と言っても、悲惨な状況を目の前にすると、頑張ってしまうのがボランティア。せめても夜だけはゆっくり休んでもらいたいと思っても、体育館に毛布一つではなかなか休まらない。しかも朝食として届いたパンはなんと揚げアンパンを含めた菓子パンばかり。なのに、不満一つ出ることなく、ただひたすら被災された方のためにと復旧活動を行うボランティアの方々の働きには頭が下がる思いだった。

高知県西南豪雨災害で思い出す事業と言えば、「1.17高知からKOBEに“灯り”を」だ。2001年度では、事業で使用する竹を被災地(土佐清水市・大月町)から切り出し、被災地(神戸)へ届けることとなり、ノコギリ片手に竹を切り出しに行く1泊2日のツアーを挙行了。こんな無謀とも言えるツアーに参加費を払ってまでも参加してくれたボランティアの方がたくさんいたことに驚いた。今、考えても「よくやった」と自分たちを褒めたくなくらい大変な作業だったが、とても楽しい思い出に残る事業となった。

2004年10月には、「台風23号による水害」や「新潟県中越地震」の復旧作業に使用するタオルを、高知県内で取りまとめて被災地へ送る「災害支援タオルプロジェクト」を実施。連日、市民の方から郵送や持参



タオルプロジェクト

されるタオルでサポートセンターが占拠される事態となるくらい、25,000枚近くのタオルが集まった。直接支援はできないが、何か協力したいという市民のオモいでサポートセンターが埋め尽くされた10日間であった。

このようにサポートセンター事業はどれをとっても、市民の参加、ボランティアの協力により成り立ってきた。これからいろいろな方々の協力を得ながら、臨機応変に、現状に満足することなく、進化し続けるサポートセンターでありたいと思う。



「1.17高知からKOBEに“灯り”を」の竹切り

広報部会では、イベントやお知らせチラシ、 広報誌作製のお手伝いをします!!

①チラシを作って案内をしたいんだけど、作り方が分からない②もっと効果的なチラシを作りたいけど、どうしていいのかわからない③印刷は初めてなのでどうやって発注していいのかわからない④素敵な写真を撮りたいけど、カメラは得意じゃない⑤文章に自信がないーなど、広報でお悩みの団体、個人の方は、NPO高知市民会議広報部会にお気軽にご相談下さい!!

発行 高知市市民活動サポートセンター

企画 特定非営利活動法人
編集 NPO高知市民会議 広報部会〒780-0862 高知市鷹匠町2丁目1-43 高知市たかじょう庁舎2階
月～金/10:00～21:00 土/10:00～18:00 (日・祝日は休み)
TEL:088-820-1540 FAX:088-820-1665
E-Mail:npokochi@siminkaigi.com